

Kinship and Affinity in a Business Network of Indian Muslims : the Dyers' Community of Gujarat

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金谷, 美和 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003993

インド・ムスリムの生業における親族と
姻族ネットワークの重要性
—グジャラートの染色コミュニティの事例—

金谷美和*

Kinship and Affinity in a Business Network of Indian Muslims:
the Dyers' Community of Gujarat

Miwa Kanetani

本研究は、西インド、グジャラート州カッチ県ブジの染色業者コミュニティを事例にして、ムスリムのカースト的集団内部の社会関係を明らかにすることを目的とする。従来のインド・ムスリムの社会関係の研究は、カースト的集団間の関係に焦点がおかれ、集団を社会的に均質な存在として捕らえる傾向があった。本稿は、そのような先行研究の偏りを是正し、インド・ムスリムがカースト的集団内部のまとまりをもちつつ、生業に関わる社会関係、親族や姻族関係を中心とした社会関係を構築していることを明らかにする。

This study focuses on the social relations of Indian Muslims, the Khatri, who were a caste-like community in Kutch District, Gujarat State. I criticize previous studies on Indian Muslims, in which the inter-relations between castes have been mainly studied rather than the intra-relations of castes.

The Khatri were recognized as dyers among local people, and they produced dyed fabrics both for local demand and for regional merchants outside Kutch in such places as Bombay.

Although the Khatri had a well-established jamaat (caste-like Muslim community in Gujarat) organization, this did not actually function as a trade association. Rather the workshop owners depended on their own networks of kinship and affinity for their dyeing work.

*京都大学人文科学研究所

Key Words : Indian Muslims, dyeing work, social relations, jamaat, caste

キーワード : インド・ムスリム, 染色業, 社会関係, ジャマアト, カースト

1 序論	5 生産と親族関係
2 調査地の概要	5.1 親族関係
3 「染色カースト」としてのカトリー	5.2 親族関係と工房
3.1 植民地期の記録にあらわれるカトリー	5.3 N工房の例
3.2 ヒンドゥー・カトリーとムスリム・カトリー	5.4 N工房の分裂
3.3 絞り染めに従事するカトリー	5.5 女性の役割
3.4 カッチ・カトリーとしてのまとまり	6 分業成立の歴史
4 絞り染めの生産形態	6.1 アブラーサーとジャームナガル, ボンベイ
4.1 工房と親方	6.2 アブラーサーの職人と仲介者の登場
4.2 絞りの職人	6.3 アブラーサーからブジへ
4.3 仲介者	6.4 N工房の親方たち
	7 結論

1 序論

本稿は、グジャラート州カッチ県ブジの染色業コミュニティ、カトリーの事例を取り上げ、生産業を通じてカトリーたちがどのような社会関係を構築しているかを明らかにする。それによって、従来のインド・ムスリム社会論におけるカースト論を批判する。特に、従来のムスリムのカースト論では、集団間の社会関係に焦点が当てられ、集団内部の社会関係が軽視されがちであった点を批判する。

インドのムスリム社会は、これまでインドの多数派であるヒンドゥー社会に特有のカースト的構造と類似の社会構造を持っていることが議論されてきた。最初にアンサーリーによって、北インドのムスリムの間にはヒンドゥー教徒のカーストに類似する集団が観察されることが指摘され、その後アフマドラの論集で議論された。その集団は、内婚集団でしばしば世襲的な職業をもち、まとまった名称、帰属意識をもち、集団間にはヒエラルキー関係や差異化があることが明らかになった。(Ansari 1960; Ahmad 1978; 小牧 2000)¹⁾。

ヒエラルキーにおいて最も重要であったのは、アラブやアフガニスタン起源のムスリムであるアシュラーフと、ヒンドゥーからの改宗ムスリムである非アシュラーフが

ムスリムたちによって区別されており、アシュラーフが非アシュラーフよりも高位であるとみなされていることである。アシュラーフの中でも特に、預言者の子孫であるとされるサイヤドはヒエラルキーの頂点に位置する（Ansari 1960: 35-51; 小牧 2000: 279）。

このように、インド・ムスリムのカースト的集団についての従来の議論は、集団間の関係を中心として、集団間を差異化する観念を明らかにすることに焦点がおかれた。ヒンドゥーと共通するものなのか、あるいは異なる観念によって差異化がなされているのかに関心が集まった。例えば、カースト名称のイスラーム的な変更による集団の地位上昇などは、ヒンドゥー教徒とは異なる現象である（Ansari 1960: 37-38; 小牧 2000: 304-307）。また、ヴァトゥクは、南インドのムスリムはグループに分かれているものの、集団間を差異として捉え、ヒンドゥー教徒のカースト的なヒエラルキーとしては捉えていないと述べた（Vatuk 1996）。

ミシュラは、グジャラートのムスリムの研究を行い、グジャラートにも北インドと同様にカースト的な組織があり、それらはナート、あるいはジャマーアトと呼ばれていることを明らかにした。しかし、北インドとは異なり、アシュラーフと非アシュラーフの違いは明確ではないこと、一部のグループには、農業から商業への転換による経済的地位の上昇による社会的地位の上昇がみられることなどを挙げている（Misra 1985: 133-138）。

さらにミシュラは、ジャマーアトと、カースト的なジャマーアト・バンディと呼ばれるジャマーアトの組織は、イスラームの平等主義と矛盾すると人々に認識されながらも求心力をもち、内婚などを通してむしろより強化されており、グジャラートのムスリムの社会にとって重要な社会単位となっていることを指摘している。しかも一方では逆に、ジャマーアト組織を通じて、反イスラーム的な慣習の撲滅などが図られており、ジャマーアトを通してイスラーム化が人々の間に浸透しているという現象も生じているともいう（Misra 1985: 139-149）。

グジャラートでは、ポーホラー、ホージャ、メーモンといった、経済的にも社会的にも地位の高い商人コミュニティの存在が有名である。これら商人コミュニティもカースト的な集団であり、コミュニティのまとまりと相互扶助が強く、商売の上でもコミュニティのネットワークが生かされている。

しかし、これらの商人コミュニティは、緊密なジャマーアト組織をもちつつ、財産管理や生業のために親族関係を重要視しているが、その点についてミシュラや、やはりグジャラートのムスリム商人を研究したエンジニアは見落としている²⁾。

ミシュラは、商人コミュニティが経済的な力をつけ、社会的威信を獲得していった点について、ジャマール全体としてのまとまりを強調した。裕福なジャマール・メンバーによる教育と住居の提供に重点をおいた互助的な助け合いが、全体としてのジャマールの地位向上に役立ったと述べる (Misra 1985: 139-149)。エンジニアも、商業コミュニティ内部で経済的格差などがあることを指摘しながら、ジャマールのまとまりと排他的なアイデンティティの保持を強調している (Engineer 1988: 3-10)。

ミシュラやエンジニアの研究は、グジャラートのムスリムのジャマール組織の存在と機能とについて明らかにした点で評価できるが、ジャマールのまとまりを強調しすぎて、ジャマールを社会的に均質な存在としてみてしまっている。そのような見方は、ムスリムの異なる集団同士の相違を強調しすぎたせいでもある。

インドのカースト論でも、カースト間の関係よりも、カースト内部の社会関係を明らかにすることに視点を移した研究がある。従来の村落研究では、カースト間の関係に焦点が当てられがちであったのに比べて、ポーコックの研究は、村落において、ヒンドゥー教徒の異なるカースト間関係よりも、カースト内関係の方がしばしばより重要である点を示している (Pocock 1972)³⁾。

本稿では、同様のことをムスリム社会研究に対して指摘したい。ムスリムのジャマールは、確かにまとまりがあるが、ジャマールは決して均質な集団ではなく、内部には貧富の差がある。カースト内婚をとっているが、同じカーストの者なら誰とでも結婚するというわけではない。また、生業においても必ずしもジャマールが同業者組合として機能しているとは限らない。

カーストが、生産業者や商人にとってのギルド、つまり同業者組合のようなものとして機能している例もある。マインズは、ヒンドゥーの職人にとって、カーストはギルド的機能をもつことを指摘している (Mines 1984)。ムスリムにとっても、カースト的組織は商業的機能を持ち、徒弟制のもとでの職業訓練、仕事の技術や雇用を守ることを行い、資本主義的経済に適応しているとグッドフレンドは述べている (Goodfriend 1983: 132-136)。

注意すべきなのは、常にカースト (ジャマール) が、どの局面においても最も重要であるわけではないということである。その点について北インドのムスリム社会を論じたマンは、複数のアイデンティティが重なり合い、時に応じて家族アイデンティティや、ムスリムとしてのアイデンティティ、あるいは階級アイデンティティなどが強調される様子を記述している。一般に北インドのムスリムのアイデンティティにとって最も重要なのは、カースト的組織であるが、生産業に携わる者にとって一番重

要なアイデンティティは家族を単位としているとマンは述べている (Mann 1992: 16)。

カッチ県で染色業に携わっているのは、カトリー (Khatri) というムスリムのジャマートである。カトリーはヒンドゥー教徒からの改宗ムスリムで、カースト的な内婚制度や職業の世襲といったまとまりをもっている。カッチ県のカトリーは、絞り染め (バーンダニー, *bandhani*)、木版捺染、ろうけつ染めなど多量の技術による染織品生産に携わっている⁴⁾。カトリーは、カッチのムスリムのジャマートのなかで3番目に人口が多く、よく組織されたジャマート組織を持っている。しかし、染色という仕事をジャマートがほぼ独占しているにも関わらず、ジャマートは染色業にとって生産組合のようなものとしては機能していない。

カッチのカトリーたちは、「染色カースト」として地元社会において認知され、ジャマートの生業として染色業に携わってきた。19世紀にはローカルな需要に合った布の染色と同時に、インド洋海域で行われた交易むけの染色を行っていた。現在は、ローカルな需要にあった染織品を生産しつつ、商品の主流は、都市の中産階級向けのものへと転換している。

本稿では、N工房というブジ在住の絞り染めを生産する染色工房を中心にして、カトリーたちが、親族・姻族関係を基盤にして染色業という生業を行っていることを明らかにし、カトリー内部の社会関係を形成してきたことを明らかにする。

2 調査地の概要

カッチ (Kutch) 県はインド西部グジャラート (Gujarat) 州の行政区 (district) の一つである。カッチ県の全人口は126万2,507人、首都ブジ (Bhuj) の人口は12万1,009人である (District Census of Gujarat 1991: 14, 258–259) (図1)。

カッチ湿地は、高潮時やモンスーンの時期には冠水するが、乾燥気候のためにほとんどの時期には干上がっており、場所によっては白い塩の結晶のみられるところもある。雨量は年間340mmで、雨期である7月から9月に降る。降雨が少ないため、カッチ県の全土の73%は耕作に適さない荒地である (Menon 1998: 3)。また、カッチは数年ごとに干ばつに見舞われる。

カッチは北西を湿地に囲まれ、南東をアラビア海に面しているために、グジャラート側から陸の孤島となっており、地理的にも歴史的にも、現在はパキスタンに属しているスインドと関係が深かった。16世紀にスインド出身のラージプート、ジャレジャーによって王国が建設された。カッチの住民のほとんどもスインドから移住した

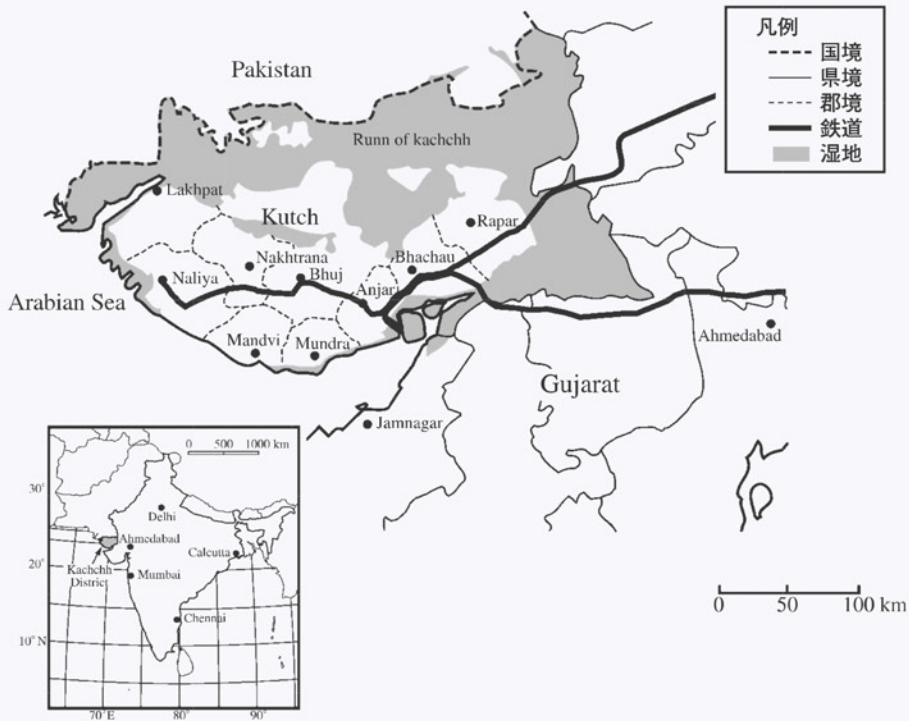


図1 カッチ地図（筆者作成）

由来をもっており、言語的⁵⁾、文化的、また染織品についてもスインドとの近親性が高い。

ムスリムは、カッチ人口の約2割を占めており⁶⁾、ヒンドゥーのカーストと類似するグループに分かれている（表1）。ムスリムの一部はアラブやアフガニスタン起源であり、他は地元の改宗ムスリムである。改宗ムスリムは、ヒンドゥーであったころの伝統的職業名と結びついた名称をもち、その職業につく者もある。本稿で中心に論じるカトリーも、改宗ムスリムで染色業を伝統的な職業としている。

農村部のムスリムは、牧畜に従事する。雨量が少ないために、農業は灌漑に頼っており、また降雨の不安定さから牧畜が盛んである。歴史的に海路による交易が盛んで、ムスリムの商人コミュニティは、インドのマラーバル海岸沿いのダマン、ボンベイ、コーチンや、東アフリカ、アラブとも交易を行っていた（Patel 1971: 290; 富永 1994, 2001）。

カッチの首都ブジは、1548年にジャレジャー王朝の初代の王であるラーオ・ケンガルジー1世（Rao Kengarji I）によって、カッチの首都として建設された王城都市（ダ

ルバール・ガード, *Darbar gadh*) である (図2)。旧市街は、高さ 10 m, 厚さ 126 cm の城壁に囲まれ、5 つの門、マハーデーブ・ゲート (Mahadev gate), ワニヤワール・ゲート (Waniawad gate), ビール・ゲート (Bhid gate), サルパト・ゲート (Sarpat gate), パトワリー・ゲート (Patwadi gate) によって外の道とつながっていた。

城壁内部は、王の元居住地であるアイナ・マハール (Aina Mahal) とプラグ・マハール (Prag Mahal) を中心にして、表通りに市場 (バザール, *bazar*)、そのすぐ裏に住居の立ち並ぶ、職住の混在した曲がりくねった通りが迷路のように入り組んだ街である。通り (セーリー, *seri*) や辻 (チャクラー, *chakra*) には、カーストの名前あるいは職業の名前が付けられている。19 世紀以降は、城壁の外部に、県庁や警察などの公共施設、住宅地ができ、ブジ市街地は拡大し続けている⁷⁾。

カトリーは、城壁内部のカトリー・チャクラーと呼ばれる一角に居住している。染色工房は、カトリー・チャクラーやダンダ・バザールを中心に約 40 軒ある。最も古い工房は創業約 100 年と言われる 2 つの工房である (表 2 の 4 番と 23 番)。他の工房は、最初の二つから分かれたか、あるいは農村からブジに移住してきたものである。

なお、1 ルピー=約 3 円 (1998 年) として計算する。

3 「染色カースト」としてのカトリー

本章では、カトリーのほとんどが染色業に従事し、染色業がジャマアートの生業としてみなされていることを、歴史史料と民族誌的データより明らかにする。歴史資料として、植民地期に記録されたセンサスや地誌 (*gazetteer*) を参照する。

表 1 ムスリムのジャマアト

ジャマアト	伝統的職業
Saiyad	教師, 農業, サービス
Shaikh	家畜の繁殖, 農業
Moghul	兵士
Momna	農業, サービス
Khoja	商業
Bohra	商業
Samma	農業, 家畜繁殖と売買
Memon	農業, 労働, 商業
Sonara	商業
Khatri	染色, 大工, 農業
Kumbhar	壺作り
Sanghar	牛飼い, 農業, サービス
Jat	牛売買
mardhari	牧畜
Miyana	兵士, 船乗り, 農業
Bhadala	船乗り
Sumra	兵士, 船乗り, 木こり, 農業
Ker	農業, 牛飼い

Gujarat State Gazetteers, Kutch District 1971 を参照して筆者作成

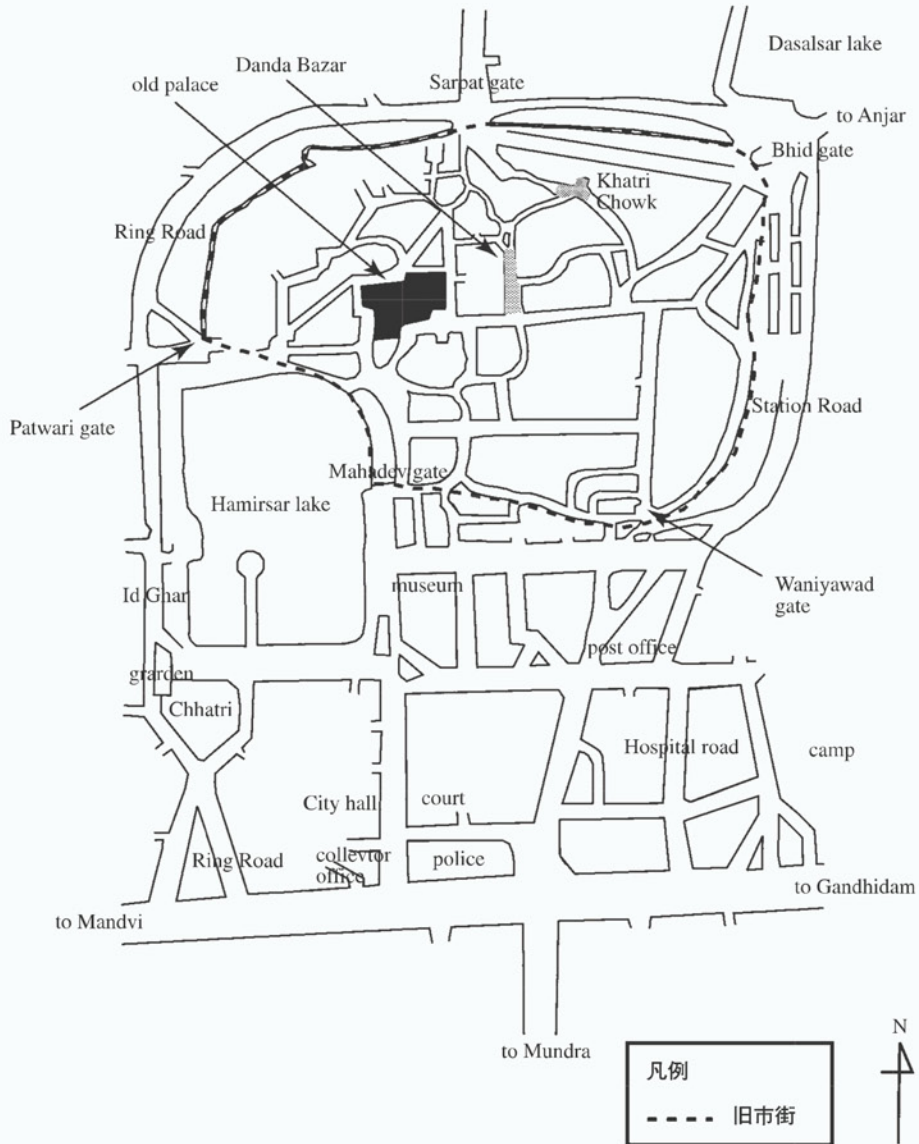


図2 ブジ地図（筆者作成）

3.1 植民地期の記録にあらわれるカトリー

カトリーについての記述のうち最も早いものは、1880年の *Gazetteer of the Bombay Presidency vol. V, Cutch, Palanpur and Mahi Kantha* である。そこでは、ムスリムのコミュニティとしてカトリーがあり、職業は染色、大工、耕作であると記されている

表2 ブジの絞り染め工房

番号	年商(ルピー)	職人数	出身
1	2,700,000	560	Bhadra, vinjan
2	100,000	10	Bhuj
3	500,000	105	Bhuj
4	500,000	150	Bhuj
5			Bhuj
6	30,000	100	Bhuj
7	10,000	15	Bhuj
8	500,000	153	Bhuj
9	240,000	50	Nilona
10	360,000	50	Bachau
11		100	Bara
12	100,000	15	Bara
13	300,000	26	Bara
14	600,000	135	Mandvi
15	84,000	5	Bhadra
16	1,200,000	250	Bhadra
17	1,500,000	350	Mudan
18	700,000	105	Bhuj
19	300,000	53	Keroi
20	800,000	152	Keroi
21	250,000	200	Bhuj
22	500,000	50	Bhuj
23	500,000	150	Bhuj

(筆者作成, 1998年)

(*Gazetteer of the Bombay Presidency vol. V, Cutch, Palanpur and Mahi Kantha* 1880: 94)。

また、カッチの染色業についての記述の中に、それに従事するのは、コンバトリー (Khombhatri) とカトリー・カーストから改宗したムスリムと、ヒンドゥーのカトリーであると記されている。その数は、165世帯の染色業者のうち112世帯はイスラーム教徒のカトリーで、53世帯がヒンドゥー教徒のカトリーであると記されている (*Gazetteer of the Bombay Presidency* 1880: 94, 126)。同じ地誌のシリーズで、1884年に出版された *Gazetteer of the Bombay Presidency, vol. VIII, Kathiawar, Bombay* では、カトリーは、捺染業と染色業であり、また絹と木綿の機織りも行くと記されている (*Gazetteer of the Bombay Presidency* 1884: 152)。

1896年に出版された C. G. H. Fawcett による *A Monograph on Dyes and Dyeing in the Bombay Presidency* によると、染色に携わるのは特定のいくつかのカーストであり、そのうちの 하나가カトリーであるとされ、もともとカトリーは染色がその仕事であるが、現在では絹と木綿の機織りや、金銀糸の製造、大工、轆轤鉋師、ブロックを積む

仕事、耕作などにも携わっていると記されている (Fawcett 1896: 2)。

1901年に出版された *Gazetteer of the Bombay Presidency, vol. IX, part I, Gujarat populations, Hindus* では、カトリーは機織り (weaver) と記され (*Gazetteer of the Bombay Presidency* 1901: 188), *part II, Gujarat populations: Musalmans, Parsis* では、染色に携わっているコミュニティは、ラングレーズ (Rangrez)⁸⁾ で、ヒンドゥーのカトリーからの改宗者であると記されている (*Gazetteer of the Bombay Presidency* 1901)。1907年に出版された *Gazetteer of the Province of Sind* では、ボンベイ・プレジデンシーで行われている木綿の染色の仕事の総量のうち4分の3はスインドで行われており、それに携わっている染色カースト (dyeing caste) は、カトリーあるいはカティ (Khati) であると記されている (*Gazetteer of the Province of Sind* 1907)。

また、1922年に出版された R. E. Enthoven の *The Tribes and Castes of Bombay* によると、カトリーは機織りに従事する者であると記されている (Enthoven 1922: 205–208)。

以上見たように、19世紀の後半から20世紀初期にかけての植民地期の記録では、ボンベイ管区においてカトリーは染色業に携わる者、あるいは絹と木綿の機織りに携わる者として記されていることがわかる。また、カトリーにはヒンドゥー教徒のカトリーと、ムスリムのカトリーが存在し、双方が染色業や機織り業に携わっていることがわかる。

3.2 ヒンドゥー・カトリーとムスリム・カトリー

キャンベルによると、カトリーは16世紀半ばにスインドからカッチに移住してきて、カッチで改宗した。改宗の理由は、カッチのサラスワティー・ブラーマンとの諍いが原因であったと書かれている (Campbell 1901: 94)。改宗の原因についてパテルは、戦争で寡婦がたくさん生じたときに、寡婦の再婚を認めないブラーマンと対立して、寡婦の再婚を認めるイスラームに改宗したとも記している (Patel 1974)。

改宗した後も、ヒンドゥー・カトリーとムスリム・カトリーは、社会構造や習慣、生業、居住地の多くを共有していた。双方のカトリーは同じ名称のサブ・カーストやクランをもっており、婚礼衣装も同じものを用いていた⁹⁾。

19世紀後半から20世紀初頭のセンサスや地誌などの記録では、グジャラートではヒンドゥーのカトリーとムスリムのカトリーの双方が染色に携わっていることが記されていた。グジャラートのサウラシュトラヤパナスカントでは現在でもヒンドゥー・カトリーが染色業に携わっているが¹⁰⁾、カッチでは染色業に携わっているのは、ムスリムのカトリーのみで、ヒンドゥーのカトリーはカッチ全体でも3軒のみである¹¹⁾。

また、ヒンドゥー・カトリーとムスリム・カトリーの関係も変化している。マンドヴィーでは、両者の間の関係は、19世紀前半までは密接であった。マンドヴィーでは、ヒンドゥーとムスリムのカトリーはひとつのコミュニティとして、ラングチューリー (*rangchūlī*, 染色場) を共有していた。ラングチューリーは、全染色業カトリー (*Rangara Khatri Samasta*) によって1728年に購入され、1832年までヒンドゥー・カトリーとムスリム・カトリーの共同の持ち物であった (Patel 1976: 50-58)。

しかし、ヒンドゥーとムスリムのカトリーの間には婚姻関係はなかったし、次第に両者は別々のコミュニティとして認識されていった¹²⁾。

3.3 絞り染めに従事するカトリー

染色業は、技法によっていくつかの種類に分けることができる。本稿で論じる絞り染めは、もっとも従事者が多い。

絞り染めは、カッチでバーンダニーと呼ばれ、防染 (*resist print*) の一種である¹³⁾。布の一部を糸で縛り、浸し染めすることで、糸で縛った部分が染まらずに模様になる技法のことである。バーンダニーは、グジャラーティー語とカッチー語で、「絞ったもの」という意味をもつ。カッチー語で *band badhmun* は、動詞の「絞る」という意味である。*bindi* とは絞られてできた点ひとつひとつのことである。

カッチの絞り染めの起源は明らかではないが、マーフィーとクリル (Murphy and Crill 1991: 23) は、ヴァラドラジャンの研究 (Varadarajan 1983: 13) に依拠しつつ、カッチに絞り染めをもたらしたのは、カトリーたちであると推測している。つまり、グジャラートの絞り染めの起源はスインド、あるいはムルタンであると考えられ、ムルタン出身で、スインドを経由して16世紀にカッチに移住してきたカトリーたちが、絞り染めの技術をもたらしたと述べている¹⁴⁾。

カトリー自身も、絞り染めとカトリーとの結びつきを認識している。カッチ西部のアブラーサー地方では、昔からこういったものだという。

カトリーは畑の仕事はしない。粗いのも細かいのも絞りを手で括る (*Khatriḷa mukar khed, jera tera bindi ta hatt tel*)。

絞り染めの技法の起源について、カトリーの間では、ファキールにヒントをもらったという伝承が伝わっている。ファキールとは、イスラーム教徒の聖なる乞食とでもいう人々のことで、聖なる力をもっているとみなされている。ファキールの中には、病気を治したり、予知の能力をもったものもいたという。このように、カッチのカト

リーは、染色の中でも特に絞り染めと結びつけられている。

絞り染めの商品は、婚礼用のヴェール（チュンダリー、*chundārī*）や、近年では女性用の衣服でありサリーやドゥパッターというスカーフである。サリーは縦1メートル、横4～5メートル、ドゥパッターは縦1メートル、横2メートルの生地から染色される。

カッチ在住のカトリーの人口は、1998年で約8,000人である。1997年のインド政府の手工芸開発長オフィス（Office of the Development Commissioner for Handicrafts）のダイレクターによると、登録されているカッチの絞り染め工房経営者は74名で、職人の総数は4,862人である（DCH 1997: 14-19）。生産者の中でのカトリーの割合は、木綿と絹の絞り染め生産では99パーセント、ウールの絞り染め生産では100パーセントである（表3）。つまり、カッチのカトリー人口の半分以上は、絞り染めに従事しているということが言える。ブジは、カトリー人口が393世帯、2,500人であり、絞り染めの小売店が27軒、絞り染め業者が約40軒ある¹⁵⁾。

表2は、ブジにある絞り染め工房のうち、調査可能であった23軒の一覧である。年商、職人数を示しているが、工房の規模と年商には差があることが分かる。

3.4 カッチ・カトリーとしてのまとめ

ムスリム・カトリーは、カトリーという単位をグジャラーティー語でカーストを意味するナート（*nāt*）と呼んだり、ウルドゥー語でジャート（*jāt*）と呼んだりする。

カトリーは、出身地によって大きく2つの内婚集団（サブ・カースト）に分けられている。カッチ出身の「カッチ・カトリー」とカッチ以外の出身、特にグジャラート南部のサウラーシュトラ出身の「ハライ・カトリー」である。カッチ・カトリーとハ

表3 カッチにおける染色業経営者のうちカトリーの割合（1997年）

染色の種類	総数	カトリー	カトリー以外	カトリーの割合
絞り染め	68	67	1	99%
絞り染め(ウール)	6	6	0	100%
ブロックプリント(アジュラク含む)	53	44	9	83%
バティック	20	19	1	95%
ディスチャージプリント	3	3	0	100%
ローガン	6	6	0	100%
マシユル	1	1	0	100%
合計	157	146	11	

注：DCH=Office of Development Commissioner for Handicrafts
Handicrafts Directory of Gujarat, 1997 を参照して筆者作成

ライ・カトリーの間で婚姻は禁止されている。

また、カトリーはグジャラートの他のムスリムと同様 (Misra 1985: 139), ジャマアト (*jamaat*) と呼ばれるコミュニティ組織をもつ。ブジのカトリー・ジャマアトは、ジャマアトハーナ (*jamaatkhāna*, コミュニティ会館) とモスクをもち、結婚式、葬式における食事の供応などにジャマアトハーナが用いられる。また、結婚時の契約書、結婚式の花婿からの花嫁への贈り物の記録、花嫁に対して父親が持たせる財の記録は、ジャマアトが記載して確認する。その他にジャマアトの催しとして、学業優秀な子供の表彰や聖者の記念日の食事の振る舞いなどがある。

このように、カッチのカトリーは、その多くが染色業に携わっており、また 19 世紀末の史料からも、「染色カースト」として認識されていた。特に、カッチ西部のアブラーサー地方では、絞り染めの生産に携わるカトリーが多い。また、カトリーたちは、しっかりしたジャマアト組織をもっていることも分かる。

4 絞り染めの生産形態

ここでは、絞り染め生産の工程と分業形態について明らかにする。絞り染め生産の工程は、親方、職人、仲介者の三者による分業によってなされている。

4.1 工房と親方

工房の経営者は、セート (*sēth*, 親方) と呼ばれる。セートは絞り染め制作の全ての工程を統括している。セートは、親方とか、主人という意味である。工房を経営するだけでなく、大きな商店を営んでいるようなセートは、パルティー (*partī*, 商会)、ベパーリー (*beparī*, 商人) とも呼ばれる。セートは、必要に応じて仕事をカーリーガル (*kārīgar*, 職人) に分担させる。

絞り染めの生産は、生地を購入、布の裁断としつけ、下染め、デザイン、絞り、染色、乾燥、仕上げの工程を経て行われる (表 4)。親方の仕事は、生地を購入、デザインの決定、染色¹⁶⁾、販売である。絞りは職人にさせ、遠隔地の職人とのやりとりは仲介者 (エージェント, *agent*) に任せる。職人には、絞りの職人、染色の職人、下絵制作の職人がいる。親方のサリー 1 枚からの利益は、表 5 のようである。

このような分業ができたのは、カッチの絞り職人が 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、ボンベイやジャムナガルといったカッチ外の都市の工房の仕事を請け負うようになったことと関わっている。

4.2 絞りの職人

絞りの技術は修得に時間がかかるため、工賃も高い。絞りの手順は、左手の薬指を布の下から差し入れて、絞りを作る箇所を持ち上げる。持ち上げた箇所を右手でつまみながらごく小さな三角形に折り畳む。折り畳んだ布を左手の親指と人差し指で固くつまみ、右手に持った糸で、4,5回固く巻きつける。左手の親指、中指、薬指の爪は伸ばしておくか、薬指に金属製の爪 (*no*) をはめる。糸はプラスチックの短い管 (ブングリー, *bungrī*, あるいはナーリー, *nārī*) に通して持ち、絡まらないようにする。絞りに、サルカム (*sarkam*) バルティー (*bartī*) の2種類の絞りがあある。サルカ

表4 絞り染めの工程

	作業内容	道具類	従事者	性別
1	原料の生地購入		親方	男
2	布の裁断, しつけ	糸	親方	男女
3	下染め(黄色に)	染料	親方, 職人	男
4	デザインを布に写す	木型, 型紙, 糸	親方, 職人	男女
5	絞る	糸	職人	男女
6	地模様を絞る	糸	職人	男女
7	染め	ガス・ストーブ	親方, 職人	男
8	一部糸をほどく		親方	男
9	二色目の染め	ガス・ストーブ	親方, 職人	男
10	乾燥		親方	男
11	糸をほどく		親方	男
12	販売		親方	男

*デザインによっては、6の工程の後に布の一部をビニールでくるんで防染し、二色に染め分けることをする。

*絞りの色を2色以上に染め分ける際には、9の工程の後に、8から9の工程を繰り返す。

*筆者作成

表5 サリーの利益

生地の種類	生地値段	下請け工賃	卸価格	工房の利益
南インド木綿	3,000	2,000	5,200	200
バナールラス製絹	4,000	2,500	6,700	200
絹(金糸格子織り)	3,500	1,400	5,000	100
絹(クレープ)	600	250	950	100
絹(ジョーゼット)	600	250	950	100
絹	425	100	550	25

*1998年, プジN工房

*単位はルピー

*筆者作成

ムはデザインの下絵通りに絞りをくくることで、バルティーはデザインの線の間を点で埋めることである。バルティーの方が難しく、熟練の職人のみがそれを行うことができる。サルカムとバルティーでは工賃も異なる。

絞りの工賃の算出方法は、絞り四つで1カリ (*kali*) と数え、1,000 カリ単位で計るのが決まりである。工賃は、職人の腕によって、あるいはバルティーとサルカムによって異なってくる。絹地に絞ったバルティーの工賃は、腕の良い職人で1,000 カリにつき150 ルピー、サルカムの工賃は80 ルピーくらいが相場である (表6)。

総絞りの絹のサリーは、絞りの数が4,000 から1万あるので、サリーを1枚絞り上げると、だいたい1,000 ルピーから2,500 ルピーの工賃になる¹⁷⁾。サリー1枚を仕上げるのに、男性の職人で約一ヶ月、女性の職人ならば家事や育児に時間をとられるので、およそ4ヶ月かかる¹⁸⁾。

4.3 仲介者

仲介者の手間賃は、サリー1枚につき50 ルピーから300 ルピーである。一人の仲介者につき一ヶ月に約100枚のサリーを仲介し、約5,000 ルピーの収入になる。

仲介者は、親方から下絵の描かれた生地と括り糸をうけとる。生地には、工房の名前を記したスタンプが押され、仲介者のイニシャルがペンで記されている。このスタンプとペン書きは、染色後には染料によって消えてしまうが、絞りの段階までは、生地の持ち主と仲介者を判別するための重要なものである。仲介者は、複数の工房からの仕事を請け負っているため、スタンプがないとどの工房からの生地であったか分からなくなる。仲介者は、帳簿に職人の名前と依頼した生地の種類、日付を書き込む。職人から絞り終わった生地をうけとると、仲介者は絞りの数を数えて工賃を算出し、職人に工賃を支払う。

仲介者は、職人の絞りの腕をよく把握して、それに適当な仕事を依頼し、職人の腕

表6 絞り工賃

素材	種類	バルティー工賃	サルカム工賃
絹サリー	ブジの職人	100	70
	アブラーサーの職人	150	80
木綿サリー		×	60
木綿オダニー		×	50

*単位はルピー

*1,000 カリ(4,000 括り)につき

*筆者作成, 1998 年

に応じた工賃を設定しなければならない。そのために、仲介者は自分で絞りができるか、あるいは絞り染めについて知識を持った人物でないと仕事がつとまらない。

このように、工房の親方は工程のすべてを統括し、特に染色と販売を担当していること、職人は絞りや下絵など専門によって行っている仕事異なること、親方と職人の間を仲介する仲介者が存在することが分かる。

5 生産と親族関係

本章では、第4章で明らかにした絞り染め生産の分業が、親族、姻族を中心とした関係によって行われていることを明らかにする。特にN工房の事例をあげ、N工房の生産に関わる職人や仲介者は、親方の父系親族と姻族からリクルートされていること、婚姻を結ぶことで、それらの関係が強化されていることを明らかにする。さらに、N工房の分裂によって、新たに親族、姻族関係を利用して新しい工房のネットワークが構築されたことを明らかにする。

5.1 親族関係

カトリーには、下位集団として、カッチ語でノック (*nokkh*) と呼ばれる父系の親族集団がある¹⁹⁾。ヒンドゥー教徒のカトリーにとって、ノックは外婚集団として機能しているが、ムスリムのカトリーにとっては、ノックは外婚集団ではなくなっており、日常生活において特に重要な意味を持っていない。一般にカトリーは99のノックをもつと言われている。カトリーは父系で父方居住をおこなう。父系の親族単位は、クトゥンプ (*kutumb*) と呼ばれる。「あなたのクトゥンプは何ですか」と尋ねる場合、父系の集団を答えるのが普通である。しかし、日常生活においては、クトゥンプという言葉が、父方の親族と母方の親族の双方を指して使われていることがしばしば観察された。

家族形態は、核家族とジョイント・ファミリーとがある。ジョイント・ファミリーは、父親の元に母親、息子たちとその妻と子供たち、未婚の子供たちを含むものである。世帯 (ガル, *ghar*) も、この二つの家族形態が単位になっていることが多い。カトリーは、兄弟が同居するジョイント・ファミリーを理想的であると考えている。兄弟は、バーンダニーの工房を共同経営するなど、生業上の協力関係があることが多いが、生業に関するトラブルがもとで対立した場合、家族が分裂することもある。

5.2 親族関係と工房

絞り染めの仕事のネットワークは、多くは親族関係によっている。工房の経営は、父親とその息子たちによるものが多い。(表2)のうち、父親と息子たちによる工房経営は、番号10と16である。父親が亡くなるとしばしばこのような兄弟同士の関係は解消されて、それぞれ独立した工房を立ち上げることもある。中には父親が健在であっても、父親と兄弟たちがそれぞれの工房をもつこともある。例えば(表2)の番号2である。また、父親と兄弟たちがそれぞれ異なる地に支店をだして、互いは独立しながらも協力しあう形態もある。例えば、(表2)の番号19と20の兄弟たちは、ジャムナガルやムンバイに支店をもっている。また、カトリーのあいだで多く見られる姉妹交換婚による二組の家族が共同で工房を経営する(表2)の番号1のような例もある。

5.3 N工房の例

具体的に、工房経営や仕事のネットワークに、親族、姻族関係がどのように関わっているかを見るために、(図3)を参照しながら説明する。(図3)は、N工房の親方の一人であるアブドゥラーの父系親族を中心に描いた親族、姻族関係図である。アブドゥラーの父のアブドルラヒームはもう亡くなっており、オジのダンドとオバのアシアットはパキスタンに移住した。カサム、アユーブという二人のオジ(FB)は健在で、それぞれ独立して仕事をしている。

カサムには、息子が5人おり、息子と共にカッチ・バンデージという名前の工房を経営している。カサムの妻のアミナは、カサムたちの妹であるサラバイの夫ハジ・ハッサンの姉である。つまりカサムとハジ・ハッサンは互いに、姉妹交換婚をした関係にあたる。ハジ・ハッサンは別の工房の親方をしている。カサムの息子の二人は、ハジ・ハッサンの娘二人とそれぞれ結婚している(双方交叉イトコ婚)。カサムとハジ・ハッサンは、義理の兄弟同士であり、また子供たちも婚姻関係を結んでいるために、姻族同士でもある。二人は、別々の工房経営をしているが、商品の融通などを行って、仕事上の協力をしあうこともある。カサムとハジ・ハッサンは、親世代が姉妹交換婚をし、子世代が双方交叉イトコ婚をしている。このように2代にわたって婚姻関係を結んでいることで、二つの家族は、強い結びつきを維持しているといえることができる。

アブドゥラーのもう一人のオジのアユーブは、息子たち二人とともにN工房の絞

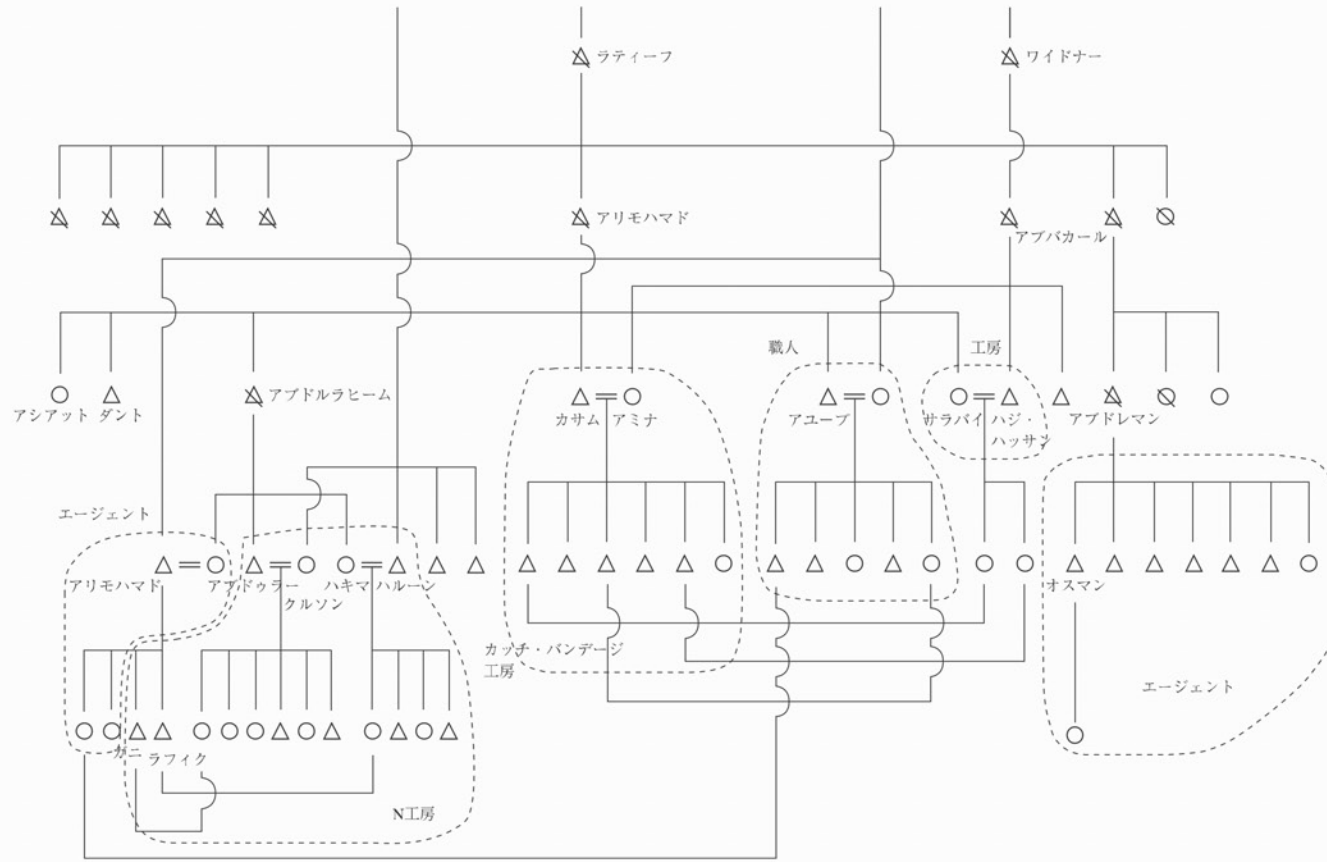


図3 アブドゥラーの父系親族と主な姻族 (筆者作成, 1999年)

りの職人をしてしたが、長男が染色の技術を学んで2000年に独立した工房を持った。アユーブの妻は、N工房親方のアブドゥラーの姉の夫であるアリモハマドの姉であり、アリモハマドの妻は、アユーブの兄の娘（BD）である。つまりアユーブとアリモハマドは姉妹交換婚をしたことになる。また、アユーブの長男はアリモハマドの長女と結婚しており（双方交叉イトコ婚）、アユーブの娘の一人はカサムの息子の一人と結婚している（父方平行イトコ婚）。アユーブとアリモハマドも、親世代が姉妹交換婚をしており、子世代が双方交叉イトコ婚をしていることで、2世代にわたって姻族関係をむすんでいることになる。アユーブは、もともとはN工房のための下絵と絞りの職人であり、アリモハマドはN工房の仲介者であった。このように、姻族同士の二人が、N工房を中心にした絞り染めのネットワークに結びついていることがわかる。

このアリモハマドとは、N工房の親方達たちも姻族関係にある。交換婚をしたアリモハマドの妻は、N工房の親方の一人であるアブドゥラーの姉である。さらに、アリモハマドの二人の息子たち、ガニとラフィクは、N工房の職人をしているのだが、N工房の親方のアブドゥラーとハルーンは、それぞれの長女を、ガニとラフィクに嫁がせているのである。ガニは、アブドゥラーの長女と結婚しており、双方交叉イトコ婚に当たる。ラフィクはハルーンの長女と結婚しており、母方平行イトコ婚になる。N工房にとっては、姻族であるアリモハマドの息子達が、工房の職人として働いており、かつ娘を嫁がせていることで、緊密な関係を維持していると言える。

N工房の二人の親方のアブドゥラーとハルーン自身も、姉妹交換婚をしており、互いに義理の兄弟同士である。また、ガニとラフィクの例で見たように、親方と仲介者、職人も親族ネットワークによっている。他にもN工房では、下絵職人はアブドゥラーのオジのアユーブであったし、仲介者の一人はすでに述べたアリモハマドである。もう一人の仲介者は、アブドゥラーの祖父の兄弟の孫オスマン（FFBSS）である。

アブドゥラーと二人の姉妹は、父を早くに亡くし、父系の男性親族（FFBS）のアブドレマンのところに居住していた。そこで3人は絞り染めの仕事を学んだという。現在の仲介者のオスマンは、アブドレマンの息子である。

このように、N工房にとって絞り染め工房の経営にとって重要な職人や仲介者は、アブドゥラーの父系親族、姻族からリクルートされていることが分かる。つまり、職人は姉の息子（ZS）やオジ（FB）、仲介者は姉の夫（ZH）や祖父の兄弟の孫（FFBSS）である。別の工房を経営しているオジのカサムとは、しばしば商品を融通しあったり、あるいは共同でセールを行ったりして協力関係にある。そして、そのような仕事

上の関係の深い相手とは、子供同士を結婚させたりして、さらに緊密な関係を構築しようとしていることが分かる。

このような親族、ネットワークは、婚姻を通してより強化、拡大される。子供の縁組みは、仕事の戦略上重要である。N工房と仕事上関係の深い相手とは、息子や娘同士を結婚させて、より関係を強化する。例えば、親方達の二人の娘は、仲介者の息子たちと結婚させている。カトリーのあいだで多く行われている婚姻形態は、姉妹交換婚とイトコ婚である。姉妹を互いに交換する婚姻は、アーメ・サーメ（向かい合っているという意味）と呼ばれる。息子がいない場合は、父系親族の男の子が交換婚の対象になる²⁰。イトコ婚も多いが、イスラーム社会に観察されるような父方の母方に対する優先は見られず、むしろ仕事上の関係を優先して縁組みがなされている。N工房の属している父系親族3世代において、15の婚姻中、交換婚は9件、イトコ婚は4件、不明が2件であった。

5.4 N工房の分裂

親族や姻族関係は、しばしばうまくいかないこともあり、そのような場合は、工房の分裂や仕事のパートナーの変更ということが起こる。N工房は、仲介者をしている親族に娘たちを嫁がせ、仕事のネットワークを強化したかにみえたが、2000年に二人の親方同士が仲違いし、二つの工房に分裂してしまった。

二人の親方は工房を二つにわけ、アブドゥラーは生産を、ハルーンはその製品の販売を担当して、それぞれ独立でやっていくことに決めた。しかし販売のほう軌道にのらなかったために、ハルーンも工房を設立して、生産から販売まで行うことにした。

この分裂を期に、親方達の親族関係や結婚戦略にも変化が現れた。もともとN工房は、アブドゥラーの父系親族、姻族関係によるネットワークが大きかったために、アブドゥラーのほうはあまり困ることはなかった。アブドゥラーはこれまでの関係をさらに強化することをおこなった。まず、アブドゥラーのほうは、義理の息子ガニ（この工房の仲介者の息子）を父親アリモハマドから独立させて工房に加え、以前ハルーンが担当していた販売の仕事任せることにした。またもう一人の仲介者であるオスマン（アブドゥラーの祖父の兄弟の孫）の第二人と、アブドゥラーの次女、三女を婚約させた。そのことによって、仲介者との関係をより強力にし、仕事をしてくれる職人を確保したのである。仲介者であるオスマンは、アブドゥラーの工房に職人の仕事を供給し、ハルーンの工房に仕事を供給しなくなった。

ハルーンのほうは、仕事のネットワークをほとんどアブドゥラーの親族、姻族関係

に依存していたために、分裂と同時に、仲介者と職人を失ったことになった。そのために、工房を立ち上げ、生産を軌道に乗せるのに苦労した。特に、仲介者の一人を失ったために、職人不足に悩んだ。そこでハルーンは、これまで下絵の仕事をしていた義理の息子ラフィクに職人との仲介の仕事をしてもらい、下絵の仕事は、別の親族（ハルーンの二人の兄弟）に依頼することで、仕事のネットワークを新しく作り直した。これまでハルーンの二人の兄弟は、弟はムンバイで別の仕事に就き、兄はブジで下絵の仕事をしていたが、ハルーンとは折り合いが悪く絶縁状態であった。

弟はハルーンに誘われてムンバイからブジに移住し、ハルーンの妻に教えてもらって下絵の仕事をした。兄のほうは、ハルーンと仲直りをした。ハルーンは、アブドゥラーの親族、姻族関係に依拠していた仕事上のネットワークを失ったために、自分の親族関係を利用して、仕事のネットワークを作り直したのである。さらにハルーンは、長男と次女の婚約を通して、新しく作り直したネットワークをより強いものにしてしようとしている。長男の婚約者は、ハルーンの工房の新しい仲介者であるラフィクの妹である。ラフィクは、ハルーンの長女の夫でもあり、ハルーンの妻の姉の息子でもある。次女の婚約者は、新しくハルーンの工房の下絵職人になったハルーンの弟の次男である。

N 工房の分裂後、ハルーンがアブドゥラーの親族関係を失っても、アユーブやその息子たちの経営する工房とは、仕事上、商品を融通しあったりして関係は続いている。それは、アユーブがハルーンの妻であるハキマ（ハキマはアユーブの BD にあたる）をかわいがっていたこともあり、またハルーンの義理の息子であるラフィクの父親アリモハマドとアユーブが姉妹交換婚をしていたこともある。

5.5 女性の役割

重要なのは、このような親族、姻族ネットワークの構築、再構築、維持に重要な役割を果たしているのが女性たちであるということである。女性たちは普通、表だって工房の経営には関わらない。絞りや下絵は、男女ともに携わることのできる仕事であるが、染色だけは男性の仕事とみなされており、工房経営と直接結びつく染色の仕事に女性が関わることはない。女性が工房の代表になるようなことは、陰口の対象にすらなる。しかし、女性は日常的な交際や、結婚式への参加、結婚式やイスラームの祭礼の際に行われる儀礼的なギフト交換を通して、親族間関係の円滑化に役割を持っている。

逆に女性同士の仲違いが、親族同士の関係悪化になり、ひいては工房の分裂につな

がることは実際に起こっている。第6節で述べた工房の分裂は、女性同士の齟齬がきっかけになって、親方同士が仲違いしたことに起因する。

また子供たちの縁組みに女性は大きな決定権をもっている。例えば、ある成功した親方が、親族や姻族関係のない他の親方の娘に、自分の息子との縁談を申し込んだことがある。親方同士は、それぞれ大きな工房を経営しており、仕事上のネットワークを組むことはよいことと思えたが、親方の妻が、娘をイトコに嫁がせた方がよいと判断したために、断ったことがある。母親は、娘を嫁がせる相手として、すでに親族や姻族関係があり、家風がよく似ているところの方が苦労がなくてよいと考えているのである。

姻族関係が仕事の上での重要なネットワーク強化につながっていることを考えると、女性が構築する人間関係が染色業に大きな役割をもっていることは明らかである。

以上、工房経営や、絞り染め生産に関わる職人や仲介者は、親族や姻族関係でつながりを持つ者がつとめて選ばれていること、子供の世代同士を結婚させることで、仕事の上のネットワークをより強化していることが明らかになった。

6 分業成立の歴史

本章では、前章で述べたような染色業のネットワークは、分業のなかから生まれてきたことを明らかにし、その分業がどのように形成されたのかを、N工房を経営する親方たちの来歴を追いながら、絞り染めをめぐる時代背景から明らかにする。生産に関わる分業は、ある時に突然始まったのではなく、生産を行う中で徐々に形作られていったこと、またそのネットワークは親族や姻族関係をもとにして作られていったことを明らかにする。

6.1 アブラーサー²¹⁾ とジャームナガル、ボンベイ

時代は、1940年代にさかのぼる。当時、インドはいまだ大英帝国の植民地下にあり、カッチは藩王国としての存在を英国に認められていた。カッチからは多くの商人が東アフリカやアラブに商船で行き来していた。カッチではアラブから輸入した良質の馬が育てられていた。このような商船が出入りする港町のマンドヴィーには、関税局や倉庫が建ち並んでいた。このような時代に、アブラーサーはどのような場所であっただろうか。他の工房の親方らの証言も交えながら、当時の絞り染めをめぐるア

ブラーサー、ジャームナガル、ボンベイ（現在のムンバイ）の関係を見たい。

カッチ西部に位置するアブラーサー地方は、もともとはジャームナガルとボンベイの絞り染め店のための、絞り染めの絞りの供給地であった。（図4）

ジャームナガルは、グジャラート州ジャームナガル県にあり、スインド起源のカッチのジャレジャ・ラージプートが1540年に建設した町であるために、カッチとは関係が深かった。カッチとジャームナガルは、カッチ湾をはさんで向かい側になり、海路を用いて行き来があった。ジャームナガルは、絞り染めの産地として有名であっ

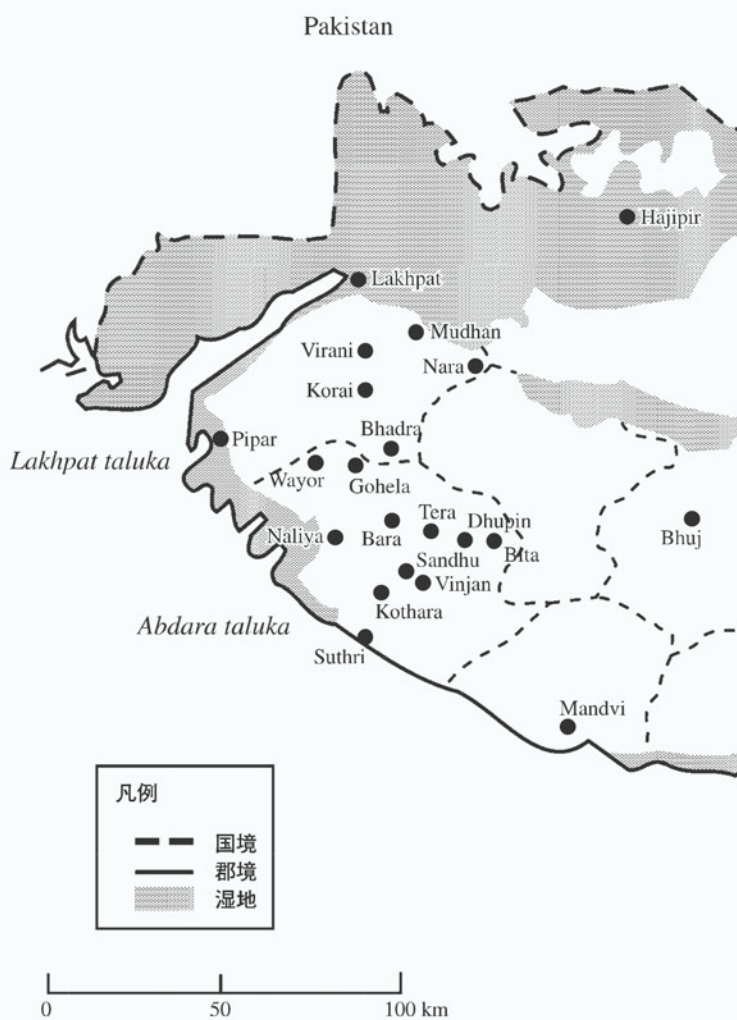


図4 アブラーサー地図（筆者作成）

た。アフマダーバードのキャリコ博物館やロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート博物館に収蔵されている絞り染めのほとんどは、サウラシュトラ産、つまりジャームナガルのものである。(表7)は、キャリコ博物館収蔵の絞り染めの一覧である。産地は、サウラシュトラ、サウラシュトラあるいはカッチと記されている。つまり、ジャームナガル産の絞り染めもその絞りはほとんどがカッチのものであったということを示している。

ジャームナガルで最も古い絞り染め工房は、ハライー・ヒンドゥー・カトリーの経営するチャガンラール・トーパンとジウラージ・ギルタルの2つあった。ジウラージ・ギルタルは1930年創業である²²⁾。ジャームナガルでは、ヒンドゥー教徒の王族や商人たちの着るガルチョラーと呼ばれる婚礼用のサリーや婚礼用の布であるチュンダリー(ヴェール)、ターバンなどを作っていたという。創業当時は、紅花²³⁾で赤色の染色がなされていた。ジャームナガルの絞り染めが有名だったのは、ジャームナガルの水質のよさによっている。あるカッチの親方は次のように言う。

ジャームナガルでは色が良く仕上がりました。ジャームナガルは水が良かったのです。ブジでは色が白っぽくなってしまいます。インドで最も染色によいのは、ジャームナガルです。明るさがあります。異なる地方には異なる気候があり、異なる水があり、明るさで言ったら、ジャームナガルのものが一番よく、他は劣ると言ってもいいでしょう。ジャームナガルの絞り染めがよい、と言うものではありません。絞りは全てカッチでしていたのです。染色の仕事では、色の明るさで良かったのです。明るいい色だと、自動的にその絞りの明るさが増すのです。美しく仕上がるのです²⁴⁾。

ボンベイは、マハーラーシュトラ州にあり、16世紀にポルトガルが支配して以来、イギリス植民地時代にも貿易港として有名であった。多くのグジャラートの商人たちが、ボンベイに支店を構えて商売をしていたことが分かっている。

ボンベイに絞り染め工房や店があったのは、交易の便の良さによる。ボンベイの絞り染めのほとんどはカッチで制作され、あるものは染色のためにわざわざジャームナガルにまで送られていたという。また、ボンベイの商人はルピア(英領インドの貨幣)で支払い、ジャームナガル商人はコリ(カッチ藩王国の貨幣)で支払った²⁵⁾。通貨の交換レートのおかげで、ルピアでもらうととてもよいお金になったので、アブラーサーの職人たちは、ボンベイ商人のために仕事をしたがったという²⁶⁾。

ボンベイからは、たくさんの絞り染めが、アラブ諸国やアフリカに輸出されていた。このような絞り染めを生産、販売していたのは、カッチのアブラーサー出身の3人のカトリー、ハジ・イスマイル、アラブ・バーワー、ニジスワーラーだった²⁷⁾。この3

表7 キャリコ博物館収蔵のグジャラートの絞り染め

番号	カタログ番号	名称	生地	産地	制作年代
1	67	オダニー(バーンダニー)	絹	サウラシュトラ	19世紀末から20世紀はじめ
2	68		木綿	サウラシュトラ or カッチ	20世紀はじめ
3	69	サリー(バーンダニー)	絹	サウラシュトラ or カッチ	19世紀末から20世紀はじめ
4	70	オダニーの一部(バーンダニー)	ジョーゼット	カッチ or サウラシュトラ	20世紀
5	71	サリー(バーンダニー)	絹	カッチ	19世紀末
6	72	オダニー(バーンダニー)	絹	サウラシュトラ or カッチ	19世紀末から20世紀はじめ
7	73	サリー(バーンダニー)	絹	サウラシュトラ	20世紀はじめ
8	74	オダニー(バーンダニー)	絹	サウラシュトラ or カッチ	19世紀末
9	75	オダニー(バーンダニー)	絹	サウラシュトラ	20世紀
10	76	オダニーの一部(バーンダニー)	絹	サウラシュトラ	20世紀
11	77	オダニー(バーンダニー)	絹	サウラシュトラ or カッチ	19世紀末から20世紀はじめ
12	78	サリー(バーンダニー)	絹	サウラシュトラ or カッチ	19世紀末
13	79	サリー(バーンダニー)	絹	サウラシュトラ or カッチ	20世紀はじめ
14	80	オダニー(バーンダニー)	絹	サウラシュトラ, おそらくジャームナガル	19世紀末から20世紀はじめ
15	81	オダニーの一部(バーンダニー)	木綿	サウラシュトラ or カッチ	20世紀半ば
16	82	オダニー(バーンダニー)	絹	カッチ	20世紀はじめ
17	83	オダニー(バーンダニー)	絹	カッチ	20世紀はじめ
18	84	オダニー(バーンダニー)	絹	カッチ	19世紀末から20世紀はじめ
19	85	オダニーの一部(バーンダニー)	木綿	カッチ	20世紀はじめから半ば
20	86	オダニー(バーンダニー)	絹	カッチ	20世紀はじめ
21	87	ハンカチ(バーンダニー)	木綿	ジャームナガル	1968年
22	89	オダニー(バーンダニー)	木綿	カッチ or サウラシュトラ	20世紀半ば
23	90	オダニー(バーンダニー)	木綿	サウラシュトラ or カッチ	20世紀半ば
24	91	サリー(バーンダニー)	木綿	サウラシュトラ or カッチ	20世紀
25	92	オダニー(バーンダニー)	木綿	サウラシュトラ or カッチ	20世紀
26	94	オダニー(バーンダニー)	木綿	サウラシュトラ or カッチ	20世紀はじめ
27	95	オダニーの一部(バーンダニー)	木綿	サウラシュトラ or カッチ	20世紀半ば
28	96	オダニー(バーンダニー)	木綿	ジャームナガル	20世紀
29	97	サリーの一部(バーンダニー)	木綿	ラージャスタン or グジャラート	20世紀
30	98	サリー(バーンダニー)	木綿	ジャームナガル	1968年
31	99	サリー(バーンダニー)	木綿	サウラシュトラ	20世紀
32	100	サリー(バーンダニー)	木綿	サウラシュトラ	20世紀
33	101	サリー(バーンダニー)	木綿	サウラシュトラ	20世紀
34	102	サリーの一部(バーンダニー)	木綿	サウラシュトラ	20世紀半ば
35	103	サリー(バーンダニー)	木綿	ジャームナガル	1968年
36	104	サリーの一部(バーンダニー)	木綿	サウラシュトラ	20世紀半ば

(Buhler, Fisher & Nabholz 1980) を参照して筆者作成

人は、カッチの職人たちに絞りの仕事を依頼していたのである。その他に、ボンベイではヒンドゥー・カトリーも絞り染め工房をもっていた²⁸⁾。

アブラーサー地方では、いくつかの村で染色は行われていたが、それらの染色は地元住民の衣服のためのものであった。アブラーサーで染色をおこなっていたカトリーたちは、ジャームナガルやボンベイで生産されていた絞り染めには関わっていなかった。ジャームナガルやボンベイで生産されていた絞り染めの絞りを行っていたアブラーサーの職人たちは、絞りの工程にのみ従事して、染色には携わっていなかったのである。

6.2 アブラーサーの職人と仲介者の登場

当時から、アブラーサー地方のカトリーは、絞りの腕前で有名だった。何人かの名工の名前が人々の記憶に残っている。例えば、ワイヨール村のスレイマン・イスマイル・タロティ、コタラー村のレヘムトラなどである。他にも、絞りで知られた村は、ゴリア村 (Golia)、バドロ村 (N 工房のアブドゥラーの生まれた村である)、ドフィー村 (Dophi)、ヴィンジャン村 (N 工房のハルーンの生まれた村である)、アスリー村 (Asri)、コロダ村 (Koroda)、ペパル村 (Pepal)、バラ村 (Bara)、コラ村 (Kora)、ネンドー・ヴィーラーニー村 (nendo Vilani) ナラ村 (Nara)、ビット村 (Bitta) などがある。(図4参照)

アブラーサーは、ジャームナガルからもボンベイからも遠隔地だったので、直接職人たちが、工房から仕事を受けることは難しかった。そこで、工房は仲介者を使った。

ボンベイの絞り染め工房のために、絞りの仕事の仲介を最初に始めたのは、サンドゥ村のカサム・ラヒムナ・カトリーだった。アブラーサーの職人たちは、カサムのところに行って、ボンベイからの仕事をもらったという。カサムから仕事を回してもらえなかった職人は、直接ジャームナガルに出稼ぎにも行ったという。N 工房のアブドゥラーの父もそのような職人の一人だった。

ジャームナガルからの仕事は、カッチのブジヤアンジャール在住の仲介者を経て、アブラーサーに依頼された²⁹⁾。そのうち、ジャームナガルむけに絞り染めを販売していたカッチのカトリーの中から、ジャームナガルに移住して工房を経営する者が現れた。もっとも早くジャームナガルに来たのが、ケロイワラーというオルク(呼び名)で知られる一家のウマール・イブラヒムで、彼はまずカッチ東部のケロイ村からアンジャールに移住した。そしてアンジャールからジャームナガルに来たのが1946年のことである。

1961年のセンサスでは、カッチ出身のムスリム・カトリー 25軒が絞り染め工房を経営していると記されている（Census of India 1961: 7-8）。1946年から1961年の間に次々とカッチからカトリーが移住してきたのであろう³⁰⁾。カッチ・カトリーが絞り染め工房を設立するに伴って、カッチのアブラーサー地方の村々からも職人が仕事を求めてジャームナガルにやって来た。

6.3 アブラーサーからブジへ

1947年にインドは英国の植民地から独立し、カッチはまずボンベイ州に、のちにグジャラート州に編入された。それまでつながりの深かったスインドはパキスタン領に併合され、容易に行き来ができなくなった。王城であったブジは、カッチ県の県庁所在地となり、県の行政や物流の中心となっていった。

このようななかで、アブラーサーの職人たちはブジに移住するようになった。これまでジャームナガルやボンベイの絞り染め工房の絞り職人をしてきたアブラーサーのカトリーたちの一部は、仲介者として仕事をしたりしていたが、そのようなカトリーの中から染色も行って、自らが親方として工房を経営しようとする者が現れた。

例えば、アブバカル・ワイドナーは、ラクパット・タールカーのムダン村（Mudhan）出身なので、ムダンワラーと呼ばれていたが、ブジに移住して仲介業を行っていた。アブバカル・ワイドナーは、表12の17番である³¹⁾。また、先に述べたケロイワラーもブジで仲介者をしてきた。このような、ムダンワラーやケロイワラーといった仲介業者が、ブジで独立した工房を経営するようになった。

1950年代後半には、ボンベイからの絞り染めの輸出が減り、カッチの職人が引き受けていたボンベイからの仕事も減っていった。それまでは、ボンベイやジャームナガルを介した婚礼用のサリーやヴェールといった絞り染めを制作していたが、絞り染めの消費先の開拓と、新しい商品の開発が求められる時期にきていたのである。それが、カトリーたちの言葉でいう「ファンシー」サリーやドゥパッター、服生地といった、ファッション用の絞り染めであり、販売先はグジャラートの商都アフマダーバードであった。

1970年代以降には、この新しい商品への転換は成功し、それに伴って工房の数は増えていった。そして、その転換の背景には、インド政府とグジャラート州政府による手工芸復興があり、それを積極的に活用していったカトリーたちがいた。1985年に工房を設立したN工房も、そのような工房の一つであった。

6.4 N 工房の親方たち

N 工房の親方たちは、アブラーサー地方の決して裕福ではない生まれである。アブドゥラーは、アブラーサーに近いラクバット・タールカーのバドラ (Bhadra) 村で 1952 年に生まれた。また、ハルーンは、1956 年にアブラーサーのヴィンジャン (Vinjan) 村に生まれた。ハルーンの祖父は、村で捺染の仕事をしていたという。

アブドゥラーは幼くして父を亡くし、ハルーンは、11 才の時に三人兄弟そろってボンベイに働きにやられ、路上で寝泊まりしながら生計を担っていた。そのような境遇から、自分たちの力で工房を設立し、発展させていくことができた。

その背景には、絞り染めをめぐる時代の変化があった。絞り染など染織品は、1970 年代より「伝統的な手工芸品」として評価され、インド政府の振興の対象になっていった。さらに、染織品はファッションの素材としての新しい需要がうまれた。彼らが工房を成功させることができたのは、政府の助成を活用し、新しい需要に対応した商品開発ができたことがある³²⁾。それには、親方やその妻たちがアブラーサーで、ジャームナガルやボンベイの商人の注文する贅沢な絞り染めの絞りに携わる職人の子どもたちとして、身近で仕事を見聞きし、また学んだ経験が役立っている。

アブドゥラーの曾祖父ラティーフが故郷バドラ村でどんな仕事をしていたかは分からない。ラティーフには7人の息子と一人の娘があり、70人の家族でひとつの家(ガル)、かまど(チューロー)のもとに住んでいたという。そのラティーフの息子たちは、みな絞り染めの仕事をしていた。ラティーフの息子の一人、アブドゥラーの祖父に当たるアリモハマドは、農業の傍ら、絞りの賃仕事をしていた。アリモハマドには4人の息子と2人の娘がいた。息子のダンドと娘のアシアットは姉妹交換婚をし、パキスタンに移住した。残りの3人の息子たち、アブドゥルラヒム、カサム、アユーブもみな絞り染めの仕事をしていた。アブドゥラーの父親であるアブドゥルラヒムは、3人の子供を残して早くに亡くなったが、カサムは現在65才、アユーブは55才になる。カサムとアユーブによると、兄弟3人は、バドラ村で一緒に絞り染めの下絵を作る仕事をしていた。

アブドゥラーの父親アブドゥルラヒムは、腕の良い絞り染めの絞り職人であった。そのころ、サンドゥ村のカサムが、ボンベイの絞り染め工房の仲介者を始めていた。しかし絞りの仕事はまだ職人に行き渡るほどはなかったために、アブドゥルラヒムはジャームナガルに仕事を求めて働きに行った。

アブドゥルラヒムは腕のよい職人であった。「私の父は、下絵のない布にゾウの文

様を絞ったものです。」と娘のハキマが言うほどの腕前であった。普通は下絵に沿って絞るところを、下絵なしに布に直接文様を絞れるほどだったということである。アブドゥルラヒムは、ジャームナガルの親方のところに仕事を請いに行き、自分の絞りの腕を見せるためにやってみせたらしい。アブドゥルラヒムは、ジャームナガルに行って3、4ヶ月で亡くなった。長男のアブドゥラーが11才、次女のハキマが生まれてまだ7ヶ月の時だったというから、それは1963年のことである。

残されたアブドゥルラヒムの妻と息子のアブドゥラー、二人の娘は、テラー村のオジ（アブドゥラーのFB）の家に滞在した。アブドゥラーは、小学校2年生で勉強をやめて、オジのところで絞り染めの仕事の見習いをした。オジは、アブドレマン・ラティーフといい、ボンベイのヒンドゥー・カトリックの工房や、ジャームナガルの工房の仲介者をしていた。オジのもとで、アブドゥラーと姉妹たちは、絞り染めの絞りの仕事、仲介者の仕事、またジャームナガルやボンベイの工房が生産してアラブやアフリカ諸国に輸出していた、贅沢な絞り染めの文様などを習い覚えた。

アブドゥラーは、1975年、25才の時にブジに働きに来て、そこで他人の絞り染め工房で染色を学んだ。翌1976年、26才の時にハルーンの姉と結婚してしばらくはバドラ村に住んでいたが、2年後ブジに移住した。

当時すでに、アブドゥラーの姻族がブジで絞り染め工房を経営していた。それがハジ・ハッサン・アブバカルである。父親のアブバカル・ワイドナーは、すでに前節で述べたように、アブラーサーのムダン村からブジに移住して、ジャームナガルむけの仲介者の仕事をしている。アブバカルを通して、アブラーサーの職人たちにジャームナガルの仕事がたくさん来ていたという。このアブバカルの息子のハジ・ハッサンは、アブドゥラーの父の姉のサラバイと結婚しており、またアブドゥラーの父の弟カサムがハッサンの妹のアミナと結婚していた（つまりハッサンとカサムは交換婚をしている）。つまり、ハジ・ハッサンはアブドゥラーにとっては姻族にあたる人物であった。

このように、当時アブラーサーからはアブドゥラーの親族や姻族がブジにでてきて絞り染めの仲介業の仕事を行っていた。アブドゥラーと前後して、オジのカサムやアユーブもブジにでてきて絞り染めの仕事を行っていたらしい。

アブドゥラーは、オジの家で絞り染めの仕事全般を覚え、またジャームナガルやボンベイの工房との仕事の仕方も学んだ。ブジでは染色も学び、他の工房で十分に経験を積んだ後、1985年に義理の弟のハルーンと一緒に絞り染めの工房を始めたのである。

絞り染めの分業は、カッチの絞り職人が、ジャームナガル、ボンベイの親方の仕事をするなかからうまれてきたものである。カッチの中でも特にアブラーサー地方のカトリーたちは、絞りの技術に優れ、その技術を生かして食べていくために、カッチの外の都市の親方たちと仕事をした。逆に技術に優れているために、農業や農村の土地所有者に縛られないで比較的自由に村を移動することができた。ジャームナガルやボンベイの親方たちによって生産されていた絞り染めは、東アフリカやアラブ諸国に輸出された。カッチのカトリーたちは、ローカルな場においてローカルな製品を作りながら、同時にカッチの外に広がる交易圏のなかで仕事を行っていたのである。

そのような仕事の仕方の中から分業が生まれ、そのような分業を成り立たせるようなネットワークがうまれていったのである。またカッチのカトリーは、みずからボンベイやジャームナガルに工房や商店、支店を開くことで、絞り染めの生産だけでなく販売までも支配し、絞り染め業をカトリー内部で独占することに成功したのである。

7 結 論

本稿では、ムスリムのカトリーというカースト的集団内部の社会関係を、布の生産工程と分業に注目することで明らかにした。

これまでのムスリムのカースト論は、マジョリティであるヒンドゥー教徒と対比して、マイノリティとして一括して論じられがちだったムスリムが、実はカースト的な集団に分かれているということを明らかにした点で評価できる。しかしムスリムにカースト的集団が存在することが判明すると、ヒンドゥー教徒社会を分析するのと同じ視点で、集団間の関係に焦点が当てられ、集団がどのようにアイデンティティを持っているか、あるいは集団間の関係がヒンドゥー社会のような宗教的ヒエラルキーを持っているか、ということに議論が集中した。

従来のインド・ムスリム論の研究方法に従って、カトリーを研究すると、改宗ムスリムであるカトリーはカッチのムスリム社会の中では決して宗教的に上位ではなく、かといって経済的には下位ではないという位置づけになる。

しかし、カトリーにとって重要な社会関係は、アラブやアフガニスタン起源のムスリムと改宗ムスリムとの間の宗教的な位階に従った、他のムスリムとの関係ではなく、布の生産者や販売者としてのカトリーが持っている、他の布の生産者や販売者、消費者との社会関係である。その社会関係には、他のムスリム集団だけでなく、ヒンドゥー教徒も含まれる。なかでも、布の生産を通じたカトリー同士の関係が重要であ

る。

従来のインド・ムスリム社会論のような、ムスリムの集団間の関係に焦点をあてた議論からは、カトリーという同一集団を、均質なまとまりとして見る視点から抜け出すことはできない。カッチ・カトリーは、人口約 8,000 人という比較的大きな内婚集団であり、ジャマーアト組織もしっかりしていて、カトリー成員の帰属意識も強い。しかし、同じカトリーの中でも、経済的地位は個人によって異なる。工房の親方など裕福な者もいれば、貧しい者もいる。このようなカトリー内部の不均質さは、従来のインド・ムスリム社会論から明らかにすることはできない。

カトリーは、染色という仕事を、親方、職人、仲介者という分業によって行っている。この分業は、カッチ以外に染色品を輸出していたジャムナガルやボンベイといった工房の仕事を請け負う中で、成立していったものである。また、このような分業は、親族や姻族のネットワークを利用して作られていった。カトリー同士の関係でもっとも重要なのは、染色という仕事を介した親方、職人、仲介者の関係と、親族、姻族関係であり、この二つの関係は、たいていは重なり合っている。

布の生産という仕事の関係は、互いに婚姻を結ぶことによって強化されている。カトリーというジャマーアトは内婚の単位として存在するが、実際にはカトリー同士は誰とでも婚姻をするわけではない。結婚相手は、仕事上すでに関係のある相手、あるいは仕事上のメリットのある相手が注意深く選ばれている。婚姻相手は、たいていは父系親族の誰か、あるいは母方の親族の誰かであって、互いにこのような相手と婚姻を繰り返すことで、一種の婚姻サークルが形成される。しかし一方で、婚姻サークルは永続的なものではない。仕事上の関係が何らかの理由で破綻すると、それまでの関係とは離れた別の親族や姻族ネットワークを利用するかたちで、婚姻相手が選ばれるようになる。

このようにして、カトリーのジャマーアト内部の社会関係は、布の生産を通して形成されており、ジャマーアトは決して均質な集団ではなく、内部にいくつもの小さいグループを抱えているといえる。そのグループはリネージやクランのような固定的なものではなく、形成や消滅がくりかえされるような流動的な性質を持ち、形成の単位となるのは個人であり、ネットワークといったほうが妥当なものである。

本稿で論じたようなジャマーアト内部の社会関係は、従来のインド・ムスリム社会論で論じられてきたような、カースト的な集団が集団ごとにまとまりをもち、他の集団と地位をめぐる競争に参入するという構造とは異なる。ジャマーアトは同じ職業をもった集団であるからこそ、ジャマーアト内部での競争がはげしくなり、染色業のう

えでも、婚姻関係上でも、どのようなネットワークを構築していくかが人々の関心の中心になるのである。このようなジャマート内部でのグループ化が進むことで、ポーコックの示すパーティダール・カーストの事例でみられたような、ジャマートの分裂が引き起こされるかどうかは、更なる観察が必要であろう。

謝 辞

本稿のもととなった調査は、日本学術振興会科学研究費の助成による。N工房の方々には、調査の便宜をはかっていただいた。草稿を京都大学の南アジア研究博論ゼミにて発表させていただき、参加者の有益なコメントをいただいた。また京都大学人文科学研究所の田中雅一教授に原稿を読んでいただいた。すべての方に感謝を記したい。

注

- 1) 一方で、南インドにはカーストのグループが存在しない (Fanslaw 1996; Mines 1978) ため、インド・ムスリムは普遍的にそのようなグループに分かれているとは言い難い。
- 2) これまで商業集団にとって親族や婚姻関係が、財産の管理や商売の拡大にとっても重要な社会関係であることは指摘されてきた (Mann 1992; Mines 1983; Rizvi 1976; Momin 1973)。
- 3) ポーコックは、グジャラート州のカンビーというカースト内にヒエラルキーが生じ、それが婚姻関係を通じて保持され、慣習の変化を引き起こし、カンビーとパーティダールという二つのカーストへの分裂を引き起こした過程を明らかにした (Pocock 1972)。
- 4) その他は、ディスチャージ・プリント、ローガンペイントに従事する。
- 5) 言語は、言語学的にはスインディー語に近いとされる独自の言語、カッチー語をもつ。カッチー語には文字がない。
- 6) カッチー県の人口構成は、ヒンドゥー教徒が 75.41%、ムスリムが 19.64%、ジャイナ教徒が 58% である (District Census of Gujarat 1991: 14, 258-259)。
- 7) 2001 年 1 月 26 日のグジャラート西部大地震によって、ブジの旧市街の 8 割は倒壊した。本稿のもととなった調査は、震災前の 1998 年から 2000 年にかけて行われた。
- 8) Rangrez とは、カースト名であるが、染色をする者という意味をもつ。
- 9) 婚礼衣装は、コミュニティの帰属を示すものとみなされている (金谷 2002, 2005b)。
- 10) サウラシュトラのジャムナガル、ポールバンドルではヒンドゥー・カトリーが絞り染め生産に携わっている。また、バナスカンタのディーサでヒンドゥー・カトリーが捺染業に従事し、パターンではマシュルという絹織物生産に携わっている。
- 11) マンドヴィーは、マシュルの生産は、ヒンドゥー・カトリーが中心になって行われていたが、現在では、マンドヴィーのヒンドゥー・カトリーの染色業者はカトリー・キショール・マントラの経営する一軒のみである。カッチで染色業に従事する他のヒンドゥー・カトリーは、ブジのキショール・カトリーと、カッチ東部に位置するベラ村のガネパットパイ・ピタンパダースの二人のみである。
- 12) 近年では、カッチ出身のヒンドゥー・カトリーの一部の人々の間で、カースト名称の改称運動がおこっている。その人々は、カトリーの起源をブラーマンとクシャトリヤが先祖であると主張し、双方の名前を継いだブラフマ・クシャトリヤという呼称を用い始めている。この呼称はカッチではそれほど浸透しておらず、またムスリム・カトリーはこの呼称を用いない。
- 13) 絞り染めは、日本、東南アジア、南米、アフリカなど世界各地に見ることのできる技法である。インド最初の絞り染めは、6 世紀から 7 世紀に描かれたアジャンター遺跡の壁画に現れており、7 世紀の文献には花嫁のオダニーとしての絞り染めの記述がでてくる (Murphy

- and Crill 1991: 9)。
- 14) ただし、他の歴史記述では、14世紀から15世紀にはすでにグジャラートやカッチに絞り染めが存在したことを示すものもある (Nabholz-Kartaschoff 1986: 274; Murphy and Crill 1991: 9-12)。
 - 15) 1961年に全インドで行われた手工芸調査によると、カッチ全体で絞り染め産業に従事する人口は4,000人であり、ブジの絞り染め産業従事者は、300-400世帯、1,500人、そのうち工房経営者が25-30世帯である。(当時のブジの全人口は40,180人) (Census of India 1961: 26-27)。
 - 16) 染色は、化学染料で行われる。アシッド (酸性染料)、ナフトール (アゾイック染料)、ヴェート (建築染料、あるいは還元染料) の3種類である。他にダイレクト (直接染料) やアリザリン (赤色の媒染染料)、BS (直接染料) を用いる工房もある。
 - 17) 絞り職人の収入は、ある25才の若い夫婦世帯では、本人と妻がともに絞りの仕事をして、サルカムの工賃が1,000カリにつき80ルピー、バルティーの工賃は1,000カリにつき150ルピーという値で仕事をし、収入が月に二人合わせて3,000ルピーであった。1ルピー=約3円 (1998年当時)。
 - 18) 近年需要が増えてきたものに、木綿の安価な服生地のための絞り染めがある。これには、それほど高度な絞りは要求されない。絞りの工賃も、服生地1枚につき12ルピーから40ルピー、サリー1枚につき25ルピーから30ルピーである。仲介者は、これらの服生地やサリーを1枚につき1ルピーの手数料で下請けに請け負っている。安価な絞り染めの絞りは、高度な技術を要求されないうえに、短時間で現金収入が得られるために、カトリー以外の主に女性たちが多数参入した。
 - 19) ノックは、グジャラーティー語でアタク (*atak*) とも呼ばれる。
 - 20) 交換婚は主に経済的な理由から行われるとカトリーは考えている。花嫁の両親が花嫁に持たせるパーティーと、花婿が花嫁に贈るペロ、マハルは、双方の家間で同時に贈り合うことで相殺されることはないが、同時に2つの婚姻を執り行うために、式自体の経費と親族間の贈答品の節約になる。
 - 21) 厳密には、ここで述べられている村々は、アブラーサー郡とラクパット郡にまたがっている。しかし、多くはアブラーサーに属しているし、またアブドゥラーやハキマの語りのなかでは、自分たちはアブラーサー出身者であり、アブラーサーの絞り染めを特別なものであるという語りが見られるために、ここでは、地域を指し示す地名としてアブラーサーを用いる。また、行政区域の地名とは別に、ローカルな地名として、アブラーサーとラクパットの一部をゲロパット (*geropat*) と呼んでいたことも踏まえている。
 - 22) ジウラージ・ギルタルは、1930年にベーチャル・デウジーがポールバンダルに店を開業、ベーチャルの息子のジムナダース・ベーチャルがボンベイに店を開業した。
 - 23) マーフィーとクリルによると、グジャラートではガルチョラー・サリーはカソンビーと呼ばれ、それは紅花によって染色されていたからであろうという (Murphy and Crill 1991: 25)。
 - 24) ジャカリヤ・ウマル・カトリー、ブジ、1999年2月2日。
 - 25) カッチの通貨は、1860年から1948年まで使用されていた (Menon 1999: 63)。
 - 26) ジャカリヤ・ウマル・カトリー、ブジ、1999年2月7日。
 - 27) ハジ・イスマイルはテラー村出身、アラブ・パーワーはストリー村出身、ニジスワラーは、コター村出身である。いずれも、ボンベイのドゥード・バザール (牛乳市場) というところに店を持っていた。
 - 28) ボンベイで工房を持っていたのは、ジムナダース・ベーチャルダースとチャーガン・トーパーの二人である。これらボンベイのヒンドゥー・カトリー商人のエージェントをしていたのが、テラー村のモハマド・スレイマン・カトリーとアブドレマン・ラティーフ・カトリー (アブドゥラーのFB) だ。アブドゥラーとハキマは、父親が亡くなった後、父親の兄であるアブドレマンのところに住み、絞り染めの仕事を学んだという。
 - 29) ケロイワラー、ジャームナガル、1999年12月5日。
 - 30) 1961年の *Census of Handicraft* (1961: 7-8) によると、ジャームナガルは、グジャラートの絞り染め産地のなかでも最大の場所であり、絞り染めに従事する人口は、約3,000人、1,090戸である。3つのコミュニティがその仕事を独占していて、最大のグループは、ヒンドゥーのプラフマ・クシャトリア (カトリー)、2番目がムスリムのカトリー (ハライ・カトリー)、3番目がムスリムのカッチ・カトリーとある。ヒンドゥーのハライ・カトリーとムスリムの

- ハライ・カトリーはジャームナガル周辺のサウラーシュトラ出身のカトリーである。ムスリムのハライ・カトリーは、職人のみで工房を経営する者はいない。
- 31) 表 12 の 17 番は、表 12 の 1 番の工房のアブドゥラーの親族にとっては姻族にあたる人々である。
- 32) 絞り染めが「手工芸品」として新たな需要をもった過程と国家による手工芸振興政策との関わり、新たな需要に染色業者たちがどのように対応したかについては(金谷 2005a)を参照。

文 献

- Ahmad, Imtiaz (ed.)
1978 *Caste and Social Stratification Among the Muslims*. Delhi: Manohar.
- Ansari, Ghaus
1960 *Muslim Caste in Uttar Pradesh: A Study of Culture Contact*. Lucknow: The Ethnographic and Folk Culture Society.
- Bhatty, Zarina
1997 Social Stratification among Muslim in India. In M. N. Srinivas (ed.) *Cast: Its Twentieth Century Avatar*. New Delhi: Penguin Books.
- Buhler, Alfred, Eberhand Fisher and Marie-Louise Nabholz
1980 *Indian Tie-dyed Fabrics*. Ahmedabad: Calico Museum.
- Das, Veena
1984 For a Folk-theology and theological anthropology of Islam. *Contributions to Indian Sociology (n.s.)* 18(2): 293-300.
- DCH (Office of the Development Commissioner for Handicrafts)
1997 *Handicrafts Directory of Gujarat*. New Delhi: Ministry of Textiles, Govt. of India.
- Engineer, Ali Asghar
1988 *The Muslim Communities of Gujarat*. Bombay.
- Enthoven, R. E.
1997(1922) *The Tribes and Castes of Bombay*. Delhi: Low price Publications.
- Fanselow, Frank Sylvester
1996 The Disinvention of Caste among Tamil Muslims. In Fuller (ed.) *Caste Today*, pp. 202-226. Oxford University Press.
- Fawcett, C. G. H.
1896 *A Monograph on Dyes and Dying in the Bombay Presidency*. Bombay.
- Goodfriend, Douglas E.
1983 Changing Concepts of Caste and Status among Old Delhi Muslims. In Imtiaz Ahmad (ed.) *Modernization and Social Change among Muslims in India*, pp. 119-152. Delhi: Manohar.
- Lindholm, C.
1986 Caste in Islam and the Problem of Deviant System: A Critique of Recent Theory. *Contribution to Indian Sociology (n.s.)* 20(1): 61-73.
- Mann, E.
1992 *Boundaries and Identities: Muslims, Work and Status in Aligarh*. New Delhi: Sage Publications.
- Mascos, J. C.
1973 Khoja of Bombay: The Defining of Formal Membership Criteria during the Nineteenth Century. In Imtiaz Ahmad (ed.) *Caste and Social Stratification among the Muslims in India*, pp. 97-116. Delhi: Manohar.
- Mehta, Deepak
1996 *Work, Ritual, Biography: A Muslim Community in North India*. New Delhi: Oxford University Press.
- Minault, Gail
1984 Some Reflections on Islamic Revivalism vs. Assimilation among Muslims in India. *Contributions to Indian Sociology (n.s.)* 18(2): 301-305.

- Mines, Mattison
1978 Social Stratification among the Muslim Tamils in Tamilnadu, South India. In Imtiaz Ahmad (ed.) *Caste and Social Stratification among the Muslims*, pp. 159–170. Delhi: Manohar.
1983 Kin Centers and Ethnicity among Muslim Tamilians. In Imtiaz Ahmad (ed.) *Modernization and Social Change among Muslims in India*, pp. 99–118. Delhi: Manohar.
1984 *The Warrior Merchants: Textiles, Trade and Territory in South India*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Misra, S. C.
1985 *Muslim Communities in Gujarat*. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.
- Momin, A. R.
1973 Muslim Caste in an Industrial Township of Maharashtra. In I. Ahmad (ed.) *Caste and Social Stratification among Muslims of India*, pp. 117–140. Delhi: Manohar.
- Murphy, Veronica and Crill, Rosemary
1991 *Tie-Dyed Textiles of India: Tradition and Trade*. London: Victoria and Albert Museum & Mapin Publishing Pvt.
- Nabholz-Kartaschoff, Marie-Louise
1986 *Golden Sprays and Scarlet Flowrs: Traditional Indian Textiles* (『スイス／バーゼル民族学博物館蔵インドの伝統染織』紫紅社)
- Patel, G. D.
1971 *Gujarat State Gazetteers, Kutch District*. Ahmedabad: Government of Gujarat.
- Patel, Yoosaf A.
1974 *Khatri Ityhaas* (カトリーの歴史) (I, II). Karachi.
- Pocock, David F.
1972 *Kanbi and Patidar: A Study of the Patidar Community of Gujarat*. Oxford: The Clarendon Press.
- Rizvi, S. M. Akram
1976 Kinship and Industry among the Muslim Karkanedas in Dalhi. In Imtiaz Ahmad (ed.) *Family, Kinship and Marriage among Muslims in India*, pp. 27–48. Delhi: Manohar.
- Robinson, Francis
1983 Islam and Muslim Society in South Asia. *Contributions to Indian Sociology* (n.s.) 17(2): 185–203.
- Vardarajan, Lotika
1983 *Traditions Textile Printing in Kutch: Ajrakh and Related Techniques*. Ahmedabad: The New Order Book Co.
- Vatuk, Sylvia.
1996 Identity and Difference or Equality in South Asian Muslim Society, Fuller, C. J. (ed.) *Caste Today*, pp. 227–262. Delhi: Oxford University Press.
- Wright, Theodore P. Jr.
1976 Muslim Kinship and Modernization: The Tyabji Clan of Bombay. In Imtiaz Ahmad (ed.) *Family, Kinship and Marriage among Muslims in India*, pp. 217–238. Delhi: Manohar.
- 金谷美和
2002 「吉なる布の文様—インド、カッチ地方の絞り染め」『民族藝術』18: 136–146。
2005a 「「手工芸」としての絞り染め布生産—インド染織品需要変化への生産者の対応」『国立民族学博物館研究報告書』29(3): 429–466。
2005b 「頭に布を被る—インド・ムスリムのバルダー論再考」(予定)。
- 小牧幸代
2000 「北インド・ムスリム社会のザード=ピラーダリー・システム—ムスリム諸集団の序列化と差異化に関する一考察」『人文学報』83: 275–314。
- デュモン,
レイ
2001 『ホモ・ヒエラルキクス—カースト体系とその意味』田中雅一、渡辺公三訳 みすず書房。
- 富永智津子
1994 「東アフリカ奴隷貿易とインド人移民—商人カーストを中心に」『叢書カースト制度と被差別民4 暮らしと経済』pp. 413–449, 明石書店。

- 2001 『ザンジバルの笛—東アフリカ・スワヒリ世界の歴史と文化』 未来社。
(センサス, 地誌)
- Cambell, James M. (ed.)
1901 *Gazetteer of the Bombay Presidency vol. 4 part 2 Gujarat populations: Muslim and Parsy.*
1901 *Gazetteer of the Bombay Presidency vol. 4 part 2 Gujarat populations: Hindu.*
Census of India 1961 vol. V-part VII-A, Selected Crafts of Gujarat, 21 Bandhani or Tie and Dye Sari of Jammagar.
District Census of Gujarat, Kutch District. 1991.
Gazetteer of the Bombay Presidency vol. V, Cutch, Palanpur, and MahiKantha. 1880.
Gazetteer of the Bombay Presidency vol. VIII, Kathiawar, Bombay. 1884.
Gazetteer of the Province of Sind. 1907.
Gazetteer of the Bombay Presidency vol. IX, part I, Gujarat populations, Hindus. 1901.
Gazetteer of the Bombay Presidency vol. IX, part II, Gujarat populations, Musalmans, Parsis. 1901.
Impreial Gazrtteer of India, Provincial Series, Bombay Presidency vol. 2 pp. 329–331. 1909.